

---

---

## 曲目解説 Disk 1

### ○Intuition Music vol.1 Concerto

本曲にて目指したのは、楽団内のコンマスがソリストを務めることの出来るコンチェルト。外から客員奏者を呼ばなくても、楽団内で完結させることの出来そうな難易度でソリストを格好良く魅せたい時の一曲として。

#### I. Introduction ~ Polonaise

基本モチーフをIntroductionで提示し、ポロネーズのリズムへと展開してゆく王道のパターンにハマてみました。  
全体から受ける印象はやや緩やか。でも飽きのこないメロディを目指して。

#### II. Tarantella

副題の通り急速6拍子のタランテラ。1楽章で提示されたモチーフを要所で取り入れるも、完全に異なった印象を受ける一曲として仕上げました。  
曲の構成は急～緩～急のこれも王道パターンで。聴衆受けも悪くないかと。

---

### ○Phrasing Puzzle ~by four scenes

一つのモチーフから展開させたフレーズを4つの異なった曲想で表現させた曲です。弾いていて普通に楽しいのではないかと思います。  
ただ、硬派系な曲のため聴衆に分かりづらく客受け効果を狙うのは難しいかもしれません。

---

### ○木星を主題とした変奏曲

ホルストの組曲「惑星」のうちの1曲「木星」から、聴き慣れたフレーズとリズムを主題として、マンドリン楽曲らしい曲編成へと再構成した一曲です。  
原曲を取り入れつつも全く異なった曲となっております。

---

### ○星屑のセレナーデ

全収録曲中、最も演奏者と聴衆に優しい曲かと思います。パート間におけるフレーズリレーと、和音バランスから生まれる美しい調べを楽しんで下さい。

---

### ○マンドリン管絃楽の為の狂詩曲「戦国」

#### シーン1. テーマ

オープニングファンファーレ、および主題・副主題を提示するとともに高揚感を演出。各シーンで使用されるモチーフをふんだんに盛り込んでいる。テンションは若干高めで。

#### シーン2. 不気味な静寂

いつ合戦が起こるか分からないような緊迫した雰囲気、そして圧倒的な不安感を演出。当時の人々にとって日々の生活といつ平穏な暮らしが壊されるか分からない不安感について回っていたのではないだろうか。

#### シーン3. 緑ある自然

場面は一転して、当時は現代と比べて豊かな自然の残る世界であったと想像。但しそれら自然もいつその場が合戦場になるやもしれない不安感をテンションコードと不協和音で表現。徐々に高まる合戦の予感。

#### シーン4. 戦火

合戦！人々の勇ましい士気、各地より上がるときの声。人々がそれぞれの正義をもってぶつかり合います。迫力と高揚感を前面に打ち出した本曲最大の山場であり、聴かせどころ。

#### シーン5. 爪痕

戦とは凄惨な殺し合い。合戦場に残るは荒れ果てた大地、人々の亡骸と残骸。人はかくも業深き生き物であることを悲しげなメロディで朗々と詠いあげた後、ギターの悲しげな音色で亡くなった人々へ鎮魂歌を捧げる。

#### シーン6. 回想

主題と副主題をモチーフとした回想場面。シーン5を軽く引きずった上で、シーン1で語られた本曲のテーマを短調で詠う。徐々に厚みを増す合奏に合わせ、少しずつ曲想に重厚感が加わる。

#### シーン7. フィナーレ

人の業。その全てを受け入れて人はまた前に進む力を得る。行く先に多くの苦難と立ち向かうことがあっても、常に前を向くことでしか生きることの出来ない存在。  
姿形は変わるとも、現代の我々にもまた同様のことが言えるのである。

---

---

曲目解説 Disk 2

○絃楽幻想曲 第一番「ガイア」

本曲の副題となっているガイアとは、地球と生物が相互に関係し合って環境を作り上げている状態を、一つの巨大な生命体と見なす仮説「ガイア理論」よりとっている。もともとガイアとはギリシャ神話の大地の女神の名であり、地球を中心とした生命の営みをテーマとしている。

<第一章 大地の詩>

雄大な大地を想像させる力強いモチーフと、生命が大地の恵みを讃える詩とで構成される。人々が大地の営みを讃えて朗々と歌い上げることで物語は始まる。後半は大地を讃えるリズムカルな踊りで幕を開け、展開を繰り返しながら宴はクライマックスへと向かう。

<第二章 海原の詩>

場面は航海。出向のファンファーレで舞台は幕を開ける。海に出る不安感と陸地への想い、そして好奇心の入り交じった航海に突如嵐が襲いかかる。雄大な自然との格闘の間、ふと脳裏をよぎる出航時の風景。そして迫り来る現実。生命の力強い生き様を表現している曲である。

<第三章 深緑の詩>

人の手の及ばぬ深緑の世界。木々の静かな営みと、時折聞こえる鳥や小動物の息吹。そこには確かに偉大な自然の営みが存在している。しばしその営みを覗いてみることにしよう。

<第四章 大空の詩>

地球上で最も広い空間、それが空。いつの時代も人々が憧れてやまないその世界を滑空する。いつしかその心は大気圏を抜け、さらには神秘の世界「宇宙」へと飛び出してゆく。宇宙から見た「ガイア」がどんなであろうか。「地球は青かった」ガガーリンがかつて残したその言葉にふさわしい世界を、これからも守ってゆくことが出来るだろうか・・・。

---

---

○絃楽幻想曲 第二番「Daily Life」

本曲は、とある社会人の男の一日を時系列に沿って表現しようとした曲です。シリアスな場面とコミカルなメロディを融合させた少々面白い構成となっておりますので、肩の力を抜いて気楽にお聴き下さい。

<第一楽章 朝の光景>

空がうっすらと白み始める早朝、その物語は幕をあけます。冒頭は少しずつ明るさを増す空、そして日の出を演出してゆきます。と、突然鳴り響く目覚ましの電子音。少しずつはっきりしてゆく意識、飛び起きる男。忙しい朝の始まりです。準備もそこそこに慌てて家を飛び出すまでを描いています。

<第二楽章 屋下りの情景>

とかく中だるみしやすい屋下り。軽快な曲の中に見え隠れする怪しげな和音。アンニュイで油断すると眠くなってしまいそうな情景を描きます。と、そこへ現れる上司の影！一気に目が覚めた男は少々意気消沈の面持ちで、いつもの日常が続きます。

<第三楽章 黄昏時の風景>

いろいろあった一日ももうすぐ終わり。男はオレンジ色に染まってゆく空や日没の風景をぼんやりと眺めながら、黄昏れます。哀愁漂うメロディと力強い低音が、物語に少々の彩りを加えます。

<第四楽章 夜から夜明けへの光景>

すっかり日も沈み、一日の仕事を終えた男は繁華街へと繰り出します。少々昭和の香りを漂わせる懐かしいジャズ系の街とワイングラスを傾けたくなるカウンターバーに流れるボサノバのBGM。そして深夜はやがて早朝となり、再び訪れる新しい朝を讃えます。

---

---